

## 村は持ち出さず持ち込まず

里草会顧問 福井正樹

村の上の方と公会堂の二か所に、みんなが「めげ箱」と呼んでいる今なら不燃物に該当する廃棄物を捨てるための縦横1メートル、高さも1メートル余りの木の箱が置かれていた。春と秋の彼岸に村の出会い（奉仕作業）があり、部落会長に指示された者が捨てに行った。山を崩して貯水池のようなものを作りかけて、なぜか途中で放棄されている荒れた広い場所があり、その土手下に穴を掘って埋めていた。

この箱は繰り返し使われているが、雨ざらしなので腐って来ることもあり、そんな時には出会いの時に大工が補強したり作り直したりしていた。このような材料は公会堂の天井裏に蓄えてあり、死者が出た時にはこの材を使って棺桶も作った。この「めげ箱」も棺桶に似たような大きさだった。その場所にはその棺桶を墓まで担ぐ輿のようなものもしまわられていて葬式に引き出される。人も土葬だし、ゴミも村の中で始末した。

当時は村中で一年間に出る「ごみ」は、この箱4杯分ということになる。何か遊びに役立つようなものが捨てられてないか箱の縁に伸びあがってのぞくのだが、そんなに役立ちそうなものはなかった。「缶けり」と呼んでいる遊びに使う空き缶が欲しい。粉ミルクの空き缶のように大き目の缶が良いのだが、めったに捨てられていなかった。

水遊びの時に「めげ拾い」という遊びをするために、白い茶碗の欠けた大き目のもの貯めて置いていた。流れもある深いところにこのかけらをたくさん投げ込んで「よーいドン」で一斉に流れに潜り、誰がどれだけ集めるかを競争する。こんなかけらも大切に川岸に集めておくのだが、このめげ箱にはめったになかった。当時は箱膳を使っていて、食事の毎に茶碗を洗ったりしなかったので割れる機会も少ない。割れても細かく砕いて鶏に食べさせたりもした。鶏は筋胃で穀物や骨などを磨り潰さねばならないので、牡蠣殻のような固いものを呑み込むのだ。

ビン類は今のように使い捨てではなく形があれば繰り返し中身を入れて使う。だから割れた時しか捨てない。ガラスが割れたら捨てるが、藁ぶきの家にはガラス戸などは少ない。昼の間には障子で明かりを通すのだが、風雨にさらされると弱い。広い縁側を挟んでしっかりとした木の雨戸があつて荒天や夜は閉じられている。だからめげ箱には切れた電球や目薬の小さなビンなどが捨てられている程度だ。

自給自足の村の生活では、燃やしたり腐ったりするごみはすべて田畑に還元される。板などに使われていた錆び釘も延ばして釘箱に入れて再利用する。藁ぶきの大きな家が長期間にわたって放置され崩壊してゆくとしても、ほとんど不燃ゴミに出すものはない。ガラスは割れていなければ再利用できるし、トタン板も残しておき必要に応じて再利用する。藁屋根を支える骨組みの木材はすべて縄で縛って固定している。天井は細い肉厚の竹が並べられていて煙が通り抜けるようになっており、煤竹と言うように黒くいぶされて、そのおかげで虫も付かなくなっているのだ。

だから新しい家を建てるときにも、自然環境から得られるものすべて賄われている。必要な材木は農閑期に切りだし皮を剥いて乾燥させて貯蔵しておく。大工や左官の本職の人も居るが、重要な要所要所を取り仕切り木組みのような細工するのであって、今のよう  
に建物一式を受け取りで引き受けるのではない。棟上げの時には大工仲間も手伝いに来るが、力のいる主な作業は親戚や村中の男達が総出で手伝う。

今でも合掌集落などのような藁屋根を葺く時には、村の人や親戚縁者がお互いに助け合  
って共同で行う。屋根に使う茅もそれぞれの家で何年も刈り蓄えて来たものを持ち寄る。もちろん重要な部分を仕舞いする本職の屋根屋が中心になって指揮も執るが、多くはその  
指示で作業は村人が経験を生かして処理する。村では大工や左官など10年近く親方の弟  
子となって家族と共に生活し、徒弟修行をした専門家もいるが、普段は百姓をしながら頼  
まれると手伝いに行く「てご」と呼んでいる人がいた。手伝ってくれということをして「てご  
してくれ」と言っていたので方言なのだろうか、プロではないが素人よりは場数を踏んだ  
セミプロの人なのだ。

祖父なども自分で秋には何日かをかけて屋根を補強するし、その時使う道具もあった。  
またお互いに必要な道具は貸借りしたものだ。年にほんの少ししか使わないが、ないと困  
るような道具は、村に一つか二つあれば事足りる。牛の鼻に穴をあける磨いて尖った木の  
錐も、使った記憶がないほど長い間屋根裏にぶら下がっていた。藁屋根の上から竹に縄を  
通した屋根針を突き刺し、屋根裏で祖母がその縄を外して梁を挟んだ横に突き刺した針に  
縄を刺して茅を抑える竹を固定してゆく。何度も手伝っているとだんだん技術を習得して  
家でも応用する。雪のすべりをよくしたいところには刈りためて乾燥しておいた熊笹など  
で補強するし、頂点の風雨にさらされるところにはヒノキの皮などで藁をくるむ。

壁は割竹を縦横に渡し、細縄で適当に締め付けて固定し、その上に壁土を練って塗り付  
ける。その壁土は竹の荒い網目から反対側にはみ出している。それが1年くらいかけて乾  
いてから反対側からも壁土を塗りつけて粗壁ができてゆく。壁土は粘土に繋ぎの役目をす  
る切り藁を混ぜて、足で何度も踏んで均質なものにする。練り込みなど、庭の片隅に家で  
準備する。粗壁をさらに上塗りして白壁など上質な壁にするなら本職に塗ってもらうが、  
小屋とか人目につかない場所なら自分で塗ればよい。障子や建具はやはり専門の指物大工  
に頼まなければならないが、障子の張り替えなどは毎年家族でやっていた。

土間も三和土たたくと言って粘土を木の分厚いへらで叩いて仕上げている。コンクリートなど  
使っていない。そこに作るかまどにしても粘土と適当な石で組み上げて焼き固めたもので  
ある。

このような自給自足の環境では不燃ごみはほんのわずかなのだ。1980年代になって  
久しぶりに祭りの時に帰ったら、翌朝には軽トラ二杯分くらいの不燃ごみが集積されてい  
た。プラスチックなどが普及し、化繊なども使われて畳もビニール系の素材が入っていて  
腐らなくなった。不燃ごみに依存する食品や資材は自給自足の生活と反比例し、経費が掛  
かる。それが文化生活の代償として公共負担も増やすことになる。